安房の女子教育と地域づくり（明治から大正期）

日頃より、旧安房南高校木造校舎（千葉県指定有形文化財）の環境整備に協力してきた「安房高等女学校木造校舎を愛する会」の活動は高く評価されてきた。

２０１９（令和元）年９月９日、強大な台風15号の直撃により、木造校舎は被害を受け、10月27日に予定されていた見学会も中止となった。修復工事後の安全が確認され、再び見学会に多くの市民が集うことを願う。

＊

築90年になる木造校舎には、今なお多くの学校資料が残されている。千葉県の教育史や地域の歴史文化を知る上で、極めて重要な資料といえる。

安房の人びとは先人の知恵を生かし、励まし合い助け合いながら、豊かなコミュニティを築いてきた姿がある。繰り返し起きる戦乱や災害を乗り越え、〝平和・交流・共生〟の理念をコミュニティの礎として、地域づくりを図ってきた。その源流には、教育が大事な役割を果たしてきた。旧安房南高校に残る安房高等女学校（以下、安房高女）の資料から、その一端をさぐってみたい。

地域教育のなかの安房高女

明治期の女子教育に関して、安房高女創立の経緯からみる。日露戦争後に女子中等教育（高女）の必要性が高まり、県議会に高女設置を提案したが、財政逼迫のため否決された。しかし、安房郡は女子進学者が県下一位であったため、郡議会でも財政上で紛糾の末、設置が決まった。ただ施設設備が間に合わず、安房郡立女子技芸学校という仮の届で文部大臣の許可が下り、１９０７（明治40）年に開設された。

初代校長の小松崎金次郎は、「初めから学科課程を高等女学校令に準拠した」と後述しており、公立では千葉高女に次いで県下２番目の「高女」創立といえる。１９０９（明治42）年に郡立安房高女となり、翌年に長須賀校舎が落成し、開校式がおこなわれた。その後、関東大震災により校舎が倒壊し、１９３０（昭和５）年に現在地の木造校舎建設に至っている。

ところで、学校教育がスタートした明治期の背景をみると、全国的には廃藩置県後の藩士たちの存在が大きい。とくに小学校の義務教育を進めるには教師の育成が課題であった。

大政奉還により徳川幕府が倒れ、薩摩・長州を中心とした新政府が誕生すると、徳川家は存続となり駿河・遠江・三河に70万石が与えられた。その結果、駿河・遠江にあった諸藩は上総や安房に移封され、なかでも駿河国田中藩は安房国白浜の長尾に移って長尾藩と称し、現在の安房高校周辺には北条陣屋があったという。その後の廃藩置県によって長尾藩士たちは４年で消滅し、600名近い旧長尾藩士たちは激変の時代を生きることとなる。藩校「日知館」で学んだ知識や技能を持ち、それぞれの得意分野に活路を求めた。東京に出た者や故郷の静岡に帰った者、あるいは新天地を求めて全国に向かった者と様々であった。

館山を中心として安房に残った者は、いわゆる「よそもの」ではあるが、学校教育や地域の商工業の分野で活躍した。行政当局は文明開化・富国強兵策のもと、急速に近代教育の普及を目ざしたが、小学校の開校準備や教員養成については旧藩士の力に頼るほかなかった。

館山の北条学区では、長尾藩陣屋が後の北条小学校になったが、開校時に旧藩士の３名が教員に任命されている。その後の北条小学校や那古小学校教員名簿などにも、旧藩士の名が連なっている。後年発行された『旧長尾藩士人名及住所 明治33年調』と『明治31年 千葉県安房郡教育会第一回会報』（千葉県安房郡教育会発行）にある名簿を照合してみると、約３割が旧藩士の関係者と思われる。

小学教員養成機関としての安房高女

安房高女創立に尽力した安房郡長の太田資行は、旧長尾藩に関わる人物といわれている。１９０８（明治41）年に義務教育年限６年制が実現し、明治の国民教育体制がつくられたときに、安房高女はスタートしている。太田郡長は、自身と同じ静岡県士族出身で同県三島高女の校長であった小松崎金次郎を招いた。学校運営に困難を抱える不十分な施設設備のもと、正式に高女へ昇格させるために、人徳ある小松崎校長の力が必要であったものの、昇格の直前に、東京高等師範学校出身で千葉高女教諭であった八巻嘉作を二代目校長に招聘している。

当時、安房郡では小学校の教員不足という課題があった。教育への要望は極めて強いが、他の産業との兼合いもあり、教育費の大幅な増額は避けたい意向であった。しかし女子教員を増やすことで、地域教育に応えたいとの思惑があったと考えられる。

八巻校長は着任後すぐ、英語と教育学を授業科目に加えている。歴史科教諭の大野太平は、校長の教育方針として「学科目の配当も県立以上の程度にして、卒業生には無試験にて尋常本科正教員の資格を与へられる事にした」と回顧録に書いている。その結果、短期間のうちに安房高女から多くの小学教員が巣立っていくことになった。

大野教諭は、八巻校長のことを「時流に一歩を超越した一見識を有」し、「深く時勢と地方の状況とを洞察」するリーダーであったと評価している。

創立年に60名入学、翌年に46名入学、翌々年に50名が入学し、総計156名が在校している。郡立安房高女としての再スタートにあたり、八巻校長は

編入試験をおこなって1年生49名・2年生44名・3年生36名の入学を許可した。

１９１３（大正２）年発行の『一覧表』に記された進路状況を見ると、安房高女第１回卒業者35名中の約半数18名が小学校教員になり、１名が東京女子高等師範学校に進学している。第２回では40名中18名、第３回では40名中11名が小学校教員となった。なお第３回では、千葉県女子師範学校二部に５名と補習科に２名、東京女子高等師範学校と東京音楽学校に各１名が進学している。

創立以来３回の卒業生のうち、約４割にあたる47名が小学校教員となり、９名が教育分野に進学している。安房高女は創立時より地域に根付きながら、女子教員養成学校として大きな役割を果たしてきた。

安房高女で学んで小学教員になった卒業生たちは、大正期にどのような教員生活を送っていったかをさぐってみたい。まず『校友会雑誌』第１号（大正４年）から第８号（昭和２年）までを参考に、第１・２回卒業生で小学校教員になった32人をみてみる。

１９１５（大正４）年から１９２７（昭和２）までの動向をみると、未婚で教員を継続７人（22％）、結婚後も教員を継続15人（47％）、結婚で退職８人（25％）、結婚後も教員継続するが後に退職１人（３％）、途中から不明１人（３％）となった。

安房高女は創立時より女子教員養成機関として、地域に根付きながら大きな役割を果たしてきた。ここでわかることは、7割の女子教員が結婚の有無に関わらず、地域の小学校教育に深く関わっていることは極めて重要な事実である。

小学校は教育の場というだけでなく、地域コミュニティの中核的存在であり、学芸会や運動会という形で人びとが集い、文化の発信地でもある。小学校教員は人格的に尊敬される存在であるとともに、地域のコーディネーター役であり、多様な能力や技能が求められる。安房高女においても、教員養成の教育のあり方が問われていたであろう。

大正期・安房の自由教育と自由画教育

１９１９（大正８）年、千葉師範学校附属小学校主事の手塚岸衛は、教師中心の画一的で注入的な教授法などの旧教育を批判し、子どもの自発性や自主性を最大限に発揮させる「自由教育」を提唱した。

大正デモクラシーの潮流のなか、自由で民主的な教育改善の動きは千葉県教育界に一石を投じた。比較的早く自由教育を取り入れた安房郡の小学校は、その推進と実績で県下トップクラスだったと『千葉県教育百年史 第２巻』に記されている。安房郡54校中、なかでも和田・江見・平群・田原・佐久間・滝田・山本・千歳・吉尾・北条・西条・忽戸・富崎・神戸・太海の15小学校が最も優れていたという。

北条小学校には安房高女を卒業した教員もおり、教員志望者にとっては教育実習の場として、深い交流が続いた。『北條小百年誌』（昭和49年発行）には、大正末期に自由教育の授業を受けた児童が、「毎日１、２時間目は自習で、あとの時間は自習したことを発表したり、それをもとに討論したりすることで勉強を進め（中略）先生はこの討論に誰もが参加するように、そして常に活発に進行するように、また方向を誤らないように、皆がうなずける結論となるようにと実に見事に導いて」くれたこと、「理科ではイネの勉強の折に、田の生態（雑草、ウンカ、イナゴ等との関連）までを観察」したことなど、当時の様子を語っている。

安房高女では自由教育の方法を授業に取り入れ、たとえば歴史科では、地域学習への理解を深めるために実物資料や郷土資料を教材化して、身近なことを通じて歴史認識を深める方法をとったと思われる。理科教育では、野外での観察や動植物の採集と分類など、自ら動いて体験する学習方法をとっていた。旧安房南高校理科室には、大正期の生徒たちが作成した標本が今なお多く残されている。

また、『北條小百年誌』には自由画教育についての記載もある。それまでの図画教育は手本を写す臨画中心であったが、館山に住んでいた洋画家の倉田白羊により、児童が自然を写生し、自由に素描することの効果や必要性が説かれていた。教員たちとの児童画教育研究団「草山会」も結成され、倉田の指導は実践に活かされ、安房地域の図画教育は急速に変化を遂げていったという。佐倉市立美術館には、倉田の指導による児童自由画が収集されており、富崎や南三原尋常小学校の生徒作品がある。

安房高女の図画教科における生徒作品も、木造校舎に残されている。自由画教育が反映されているかどうかは、今後の研究課題である。

＊

地域社会において教育がどのように位置づけられ、生かされてきたかを検証することは、現代の地域づくりにおいても重要な鍵になるのではないかと考えられる。人類史的で文化的な知恵や営みを学び、これらを伝達してゆく作業はすべて教育である。これらをさぐることなしに、安房の先人が戦乱や災害を乗り越えてきたエネルギーの源泉を見出すことはできない。

私が世界史教員として同校に在職していた時には知り得なかった学校資料を通じて、安房の教育や女性力について歴史から学び、今後も地域づくりを進めていきたいと思っている。

文責：愛沢伸雄
ＮＰＯ法人安房文化遺産フォーラム 代表
（元安房南高校世界史教師）